列島いにしえ探訪

上古

北海道・カリンバ3遺跡

「絹の痕跡」見つかる

カリンバ3遺跡の119号土壙墓で出土した漆塗りの櫛。歯の付け根（右下）に絹の可能性が高い筋条の痕跡が縦に何本も走っている

北海道恵庭市教委が調査を進めている同市黄金町のカリンバ3遺跡で十三日までに、縄文時代後期末（約三千年前）の絹の可能性が極めて高い繊維の痕跡が見つかった。わが国で最古の例は、福岡市・有田遺跡で出土した弥生時代前期末（紀元前三世紀）の平織りの絹で、今回の痕跡が絹と確認できれば、七百年以上さかのぼる画期的な発見となる。縄文人の想像以上に高度で豊かな生活が明らかにされつつあるが、食住だけでなく、「衣」の面からも裏付けられることになりそうだ。

痕跡が残っていたのは、発掘区域のほぼ中央のだ円形の墓穴（長径一・六メートル、短径一・三メートル、深さ一・〇メートル）の底から出土した赤漆塗りの櫛（くし）。布自体は腐食して消滅していたが、櫛の歯の付け根に約2センチ×1センチにわたって線状の糸の跡がくっきりと残り、所々に編み目の跡と見られる小さな点の連続が確認できた。

幅一センチ当たりの経糸（たていと）が約三十本にも達する前例のない密度で、縄文時代の布を研究している尾関清子・東海学園女子短大名誉教授は「これほど細い糸は絹である可能性が極めて高い。漆塗りの下地作業に絹を用い、その痕跡が残ったのではないか。特殊な編み物である編布（アンギン）に間違いない。当時、養蚕が行われていたかどうかはわからないが、天然の蚕から糸をとっていた可能性はある」と指摘している。恵庭市教委では専門家の意見を聞きながら、慎重に鑑定作業を進めている。

絹は紀元前三千年紀の前半ごろ中国で生産が始まり、前漢代（紀元前二〇二―後八年）以降にシルクロードなどを通じて世界各地に広まり、日本には弥生時代前期に中国から九州北部に伝わったとされてきた。しかし、今回の発見で、その起源や伝播（でんぱ）ルートにも論議が巻き起こりそうだ。

小杉康・北海道大学助教授（考古学）の話　弥生時代以降の織りの技術とは違う縄文的な編みの技術と、絹のような細い繊維との組み合わせが確認されたことは非常に興味深い。中国の絹文化とは別系統の布の世界が広がっていた可能性も考えられる」

(2001/03/14)

(C) The Yomiuri Shimbun Osaka 2001